

書評

西村良二 編著

研修医のための精神科診療の実際

小島卓也

本著は医学部卒業直後に臨床研修医として精神科研修を行う医師を対象にしているが、専門医研修のための精神科医にも役立つ実践の書である。精神科の臨床は、生物学的、心理学的、社会的なアプローチが統合的に行われる点で他科と異なっているが、それを明確に理解できるようにわかりやすく構成されている。編著者は「治すこと」「癒すこと」「よりよく生きること」の3つを柱としており、主として「治すこと」が薬物療法、「癒すこと」が精神療法、そして「よりよく生きること」がリハビリテーションに対応するとしている。全部で25項目、それぞれの項目は4～6頁以内に簡潔にまとめられていて読みやすい。

この種の実践書の中で精神療法に重きをおいてかなりのスペースを割いているものは少ない〔精神科面接(1—項目の番号)、予診と現症(2)、患者心理の理解(3)、精神療法(4)これらの合計が19頁〕。編者は、患者が現実生活の中で葛藤や不安、怒り、罪悪感、自己疑惑などに苦しみ、医師との関係性の中で自分を見つめ直したい、癒されたいという気持ちを抱いており、それに答えるのが精神療法であり、「癒す」ための重要な技術と位置づけている。

また、リハビリテーションについても重視している。デイケアや作業療法を取り上げているが、多職種のコメディカルスタッフがチームを組んで治療に当たることが重要である。社会復帰には多種の機能が関連してきて、それぞれの専門のスタッフの力を必要とするからである。精神科看護師の役割(7)、精神保健福祉士の役割(8)、精神科作業療法—作業療法士(9)

などの役割が簡潔にまとめられていて、実際にこれらの職種のコメディカルとチームを組む際に大いに役立つ。

精神科研修の現場ですぐに役立つという視点から、精神科医療に関する法律(11)、社会資源の利用(12)、精神科当直(13)、精神科救急(14)についても具体的にわかりやすく説明されている。他科との連携や社会的に需要の高い領域としては、自殺行動に関する精神医学的評価とケア(15)、リエゾン・コンサルテーション(22)、精神科医に求められる緩和ケア(23)なども記載されている。

疾患についての説明は必要最小限度に抑えられている。統合失調症(16)、感情障害(17)、不安障害と解離性障害(18)、神経症の診療の実際：身体表現性障害(19)、パーソナリティ障害(20)、アルコール関連精神障害(21)、発達障害(アスペルガー症候群)と注意欠如・多動性障害(24)、老年期の臨床：認知症とうつ病(25)などについて要領よく簡潔に記載されている。

編著者の精神医療に対する姿勢が明確に打ち出され、福岡大学の精神医学教室のスタッフが中心になって執筆しているので、全体の整合性がとれている。大変親しみやすく、精神科臨床の基本が自然に学べるハンドブックとして推薦したい。

(大宮厚生病院)

●B5 117 頁 2009 定価 3,150 円(本体 3,000 円+税) 新興医学出版社